

'92 *Challenger*

平成4年度チャレンジコース体験文集

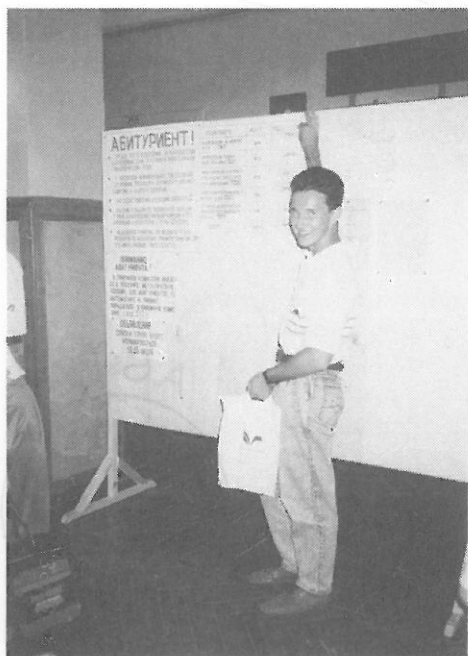




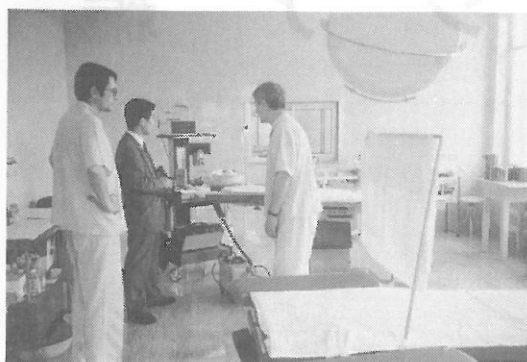
肌で感じたウラジオストク

身体障害者更生指導所

荻 莊 則 幸



第6回チャレンジコースの説明会が行われたのが平成4年5月27日であった。これまで学生時代に経験したカンボジア難民キャンプのボランティア以来、5回目の海外渡航であったが今回が一番、交通手段の調整、現地の状況の把握が事前に困難な旅であった。インツーリストと契約している日本のロシア専門の旅行会社と相談してもどうもピンとくるものがなかった。悩んでいる所に7月3日出航の県民の船がある事をラジオで聴き、交通費、宿泊費が安くあげられる事に魅力を感じ早速申し込んだ。私は、父が第二次大戦のシベリア抑留を経験していた関係で幼い頃からシベリアの厳寒の中で貨物列車生活を父から何度となく聞かされていた。ヨーロッパ、北米の情報も幾らでも手に入るが、ロシアの実際の庶民の生活がソビエト連邦の崩壊後、どうなっているのか情報はなかなか手に入らなかった。



1992年1月1日にウラジオストク市が完全解放された。人口約80万人のこの街は、東方（ウオストーク）を征服（ウラジ）せよとの名の由来のとおり帝政ロシアの積極的な極東政策により建設された。日本との関係も深く、明治初期より邦人が居留し、1907年には領事館も置かれた。また、ロシア革命直後には日本軍の「シベリア出兵」で多くの住民の血が流されている。

金角湾の太平洋艦隊の基地には多数の軍用艦が係留されていた。それらの甲板の上には下着姿の船員が甲羅干しをしていた。東西の雪解けが感じられる光景であった。

到着した夜（午後10時頃まで外は明るい）、海洋アカデミーの学生と知り合った。（写真-①）次の日、彼と街



一中を徒歩で散策したがあ、街はアムー
 ルスキ一島のとて丘陵地帯のため坂道の
 非常人多く、生活できるとは障害者や車いすの
 人が20才の学生と今はロシアの体制が若者
 ここの夢をたせてくる。また、日本の某ハ
 ひしと伝わって大船の切断。市内の病院
 大学病院で、大脚のなほ設備を見学させ
 を行ったり、いろいろとはいは抗生物質の
 を訪れ、いろいろとはいは抗生物質の細
 もらった。日本では抗生物質の細菌が問
 ぎかからM R S Aという厄介な菌が深刻
 題となっているが、ロシアでは傷口を処
 抗生物質不足が続いている。傷口を処
 置しているガーゼ、包帯等に膿がしみ
 出したまま悪臭を放っている患者さん
 や、足の傷が治らないなど足も日
 断されたり、患者さんなどとした。しか
 本では考えられない事であつた。し
 し手術室にはアメリカ製の立派な麻酔
 器があり、また日本でもそれほど普
 していない超音波碎石機が設置され
 いたりして、妙なアンバランスを感
 じた。(写真②)

日本と違い、医師の社会的地位、賃
 金は低いものの、ここで働いている外
 傷専門医や、案内してくれた小児科
 医師の表情は皆、明るかった。

デパートや商店には工業製品、電化
 製品を除けば比較的、品物が多かつた
 また良く買い物をした市の中心部から
 離れたバザール内には新鮮な、無農薬
 の野菜、果物、肉類が豊富にあった。
 (写真③)新潟の真夏の様に照り付
 ける太陽の下で、市街地より約40km
 離れた郊外でバーベキューを御馳走に
 した。往復の道路は舗装されてなく、
 かなり凹凸がきつくだ変な思いをし
 が、ここで味わった豚肉は、非常に
 “コク”があり旨かった。(写真④
 ⑤)

今回の旅では障害者、高齢者を街で
 見かける事がなかった。現在、体制が
 混乱し、スーパーインフレが続く庶民
 の生活が大変な時期には、とても社会
 的弱者に目を向ける余裕などありえ
 ないと思われた。